

目次

イントロ

イントロダクション 1

原作の時期の感覚で古典の表現を読み取る

- I. 予備知識なしに読めるバリアフリーの専門書
- II. 本書のアプローチ
- III. 古典文法フリーで日本語の感覚をよみがえらせる
- IV. 時間の壁を乗り越える

第1章

仮名文テクストの表現を読み解く方法

37

ひとつひとつのことばによく注意しながら和歌表現を解きほぐす

- 1 考察の糸口——「をぐらし」とはどういう状態なのか
- 2 ツゴモリの夕月夜
- 3 「をぐらし」とはどういう状態をさす語だったのか
- 4 「をぐらのやま」と「をくらやま」
- 5 「ゆふづくよ」の和歌の要約
- 6 仮名の運用によって和歌の心象をイメージ化する試み

- 7 秋はいにけり
- 8 対極にある感受性
- 9 貫之作「道知らば」の和歌
- 10 『後撰和歌集』秋下の末尾二首

仮名はどういう特質をもつ文字だったのか

77

——仮名ならではの表現技巧と草仮名ならではの表現技巧
 仮名と平仮名とは、別々の文字体系であることを認識する

- 1 仮名文テキストを平仮名文に置き換えるとなにが失われるか
- 2 仮名文字の特質とは
- 3 仮名の体系の形成
- 4 仮名文
- 5 仮名文における仮名と漢字との使い分け
- 6 ひ、ら木ら
- 7 読まれるため、読ませるための書記
- 8 かものか(は)ら
- 9 草仮名でしか使えない表現技巧

和歌における仮名文字の運用

105

——仮名文の初読 (recto) と次読 (verso)

表現解析の糸口を見つける

- 1 いろはうた(7+5)×4=48)
- 2 歌集の文脈のなかで個々の和歌を読む
- 3 あかすとやなく
- 4 文化的生態
- 5 「くに飽く」か、「くを飽く」か
- 6 夏の夜を明かす
- 7 清音と濁音
- 8 無標と有標
- 9 初読と次読
- 10 和歌の複線構造
- 11 方法論のまとめ
- 12 鳴き明かしてねぐらに帰ったホトトギス

古典文法で説明できない構文

135

つじつま合わせの文法的解釈が原文の表現をゆがめる

——一字一句にこだわって読み解く

- 1 いつしかと、またくころ
- 2 誹諧歌 I
- 3 ことばによるイマジネーションの喚起から、仮名によるイマジネーションの喚起へ
- 4 「たなばた」は牽牛か織女か
- 5 おそれいりやの鬼子母神
- 6 マタグ心

- 7 『類聚名義抄』とは
- 8 観智院本『類聚名義抄』の和訓マタゲ
- 9 脛に上げて
- 10 『土左日記』の「脛にあげて」と『徒然草』の「脛の白きを見て」
- 11 元永本『古今和歌集』のテキスト
- 12 本居宣長の解釈
- 13 暫定的解析
- 14 『古今和歌集』における誹諧歌の特色
- 15 誹諧歌Ⅱ
- 16 「われおほし」は誤写ではない
- 17 上の句の解釈
- 18 マタゲとマタガル
- 19 適切な表現解析のためには適切な方法がなければならない
- 20 一字一句をおろそかにしない

ウタガタの姿(形状)と形(語形)

—— 文献学的アプローチの結実

仮名文を精読するために不可欠な日本語史の基礎知識

- 1 『方丈記』冒頭の一節を読みなおす
- 2 ウタカタかウタガタか
- 3 自然現象の観察に基づいた叙述なのか
- 4 注釈書の現代語訳

- 5 浮かんでいるか、浮かんでくるか
- 6 かつ消え、かつ結びて
- 7 言語の線条性、書記テキストの線条性
- 8 「あわ」、「みのあわ」、「みなわ」、そして「うたがた」
- 9 水の上に壺のやうにて浮きたる泡とは？
- 10 ウタガタとアワ
- 11 『古今和歌集』のアワ、ミノアワ、ミナワ
- 12 『後撰和歌集』のウタガタ
- 13 『和名類聚抄』の「宇太加太」
- 14 図書寮本『類聚名義抄』の声点で語形を確認する
- 15 『和名類聚抄』の注記と日本語との対応関係
- 16 関戸本『古今和歌集』無番号歌の「うたかたも」
- 17 『万葉集』の「宇多我多毛」
- 18 『古今和歌集』無番号歌のウタガタと『万葉集』のウタガタモとの関係
- 19 元永本『古今和歌集』の無番号歌の「うたかた」
- 20 『後撰和歌集』の和歌と『古今和歌集』無番号歌との再検討
- 21 他人の空似か
- 22 仮名文テキストは引用符の挿入を受け付けない
- 23 古辞書の引用による無意味な権威づけ
- 24 テキストとしての『後撰和歌集』
- 25 平安時代の「うたがた」と『万葉集』の「うたがたも」との関係
- 26 名詞ツユの副詞化
- 27 ウタガタモのモは名詞ウタガタの概念を支えていた

- 28 ウタタ(轉)に着目する
- 29 重音脱落による*ウタタガタ↓ウタガタの可能性
- 30 ウタガタとアワとの違い
- 31 『方丈記』冒頭の構成
- 32 ウタタガタからツユへ、そして、ウタガタからウタカタへ

助動詞キの運用で物語に誘い込む

——物語冒頭文における助動詞キの表現効果

273

前言

法話の冒頭における助動詞キの表現効果

- むすび 283
- 掲載図版一覧 293
- キーワード索引 左開